

オーバーホールを行なう間隔は次第に延長されている。現在のところ、オーバーホール間隔は、8,000時間位が普通だが、少なくともこれを12,000時間以上、つまり、1.5年に1回以下程度にしたいと考えている。

(4) その他

その他の課題としては、当然のことながら、低コスト化、省スペース化がある。これに対しては、エンジンを含めたシステムの標準化、コンパクト化で対応がとられよう。エンジンメーカーがばらばらのかたちで製造する

よりも、共通の部品をより多く使うことにより互換性、量産効果が生じ、コストダウンにつながるはずである。また、省スペース化はエンジンと発電機の一体化、熱交換器の効率アップ等による小型化、パッケージ化等によりすすめられるものと思われる。

（財）石油産業活性化センターとしては、これまで述べてきた開発課題に対し、少しでも需要家のニーズに応えようと昭和65年度を目標に研究開発を行なっているところである。

会員の声・近況

田中謙一郎 西南学院大学商学部

3年ほど前に、「研究室だより」の欄に寄稿したことがある（29巻11号）。内容は、昭和45年以来14年間続けられてきた、文科系のみの大学としては珍しい「情報処理特別講座」を紹介したものであった。

COBOL、PL/I等の言語別のカリキュラムが好評で、これが本学の情報処理教育の中核をなしていた。しかし、情報化そのものが急速に進行しつつある現代において、それが夜間の特別講座であることの問題点も示唆しておいた。

その後、この件は学長の諮問を受けた検討委員会で審議され、議論を積みあげた結果、昼間の正規の単位として認定されることになった。言語処理システム、事務処理システム等の新編成のカリキュラムからなる情報処理基礎1～8は、本年4月からスタートしている。経済学部出身の私が、商学部で管理工学を担当するきっかけとなった特別講座が発展解消したことについては、昭和51年発行の修了証書を未だに保存している私としては、淋しい気がしないでもない。

なお、ついでながら、私は今夏よりスタンフォード大へ留学の予定でこの科目を担当していない。

細江守紀 九州大学経済学部経済工学科

最近私が進めているテーマは市場・組織における不確実性と情報の数理的分析です。不確実性下の組織＝取引形式については参加者間の情報の非対称性の存在が重要なポイントだと考えられます。この1、2年は行動情報の非対称性を考慮した階層的企業、チーム型企業などの比較組織分析を行なっています。

最近、ラドナー＝マスキンはチーム型企業の非有効性を繰り返しゲームの文脈で主張していますが、モニタリング、市場の不確実性観点から大変興味ある指摘となっています。また、市場との関連では、技術的イノベーション、あるいは、そのためのR&D戦略に関する情報のあり方がどのように産業組織の形成、市場成果の水準に影響を与えていくか、また、最近のVAN事業の発展にみられる情報ネットワークの形成が企業間の垂直的、水平的取引にどのような影響を与えるか等が現在の研究課題です。

これらの問題はアメリカの数理的経済・経営研究者を中心に、不実備情報、完全均衡概念などの新しいゲーム論の成果をとり入れて、さかんに分析されてきています。

この春、こうした問題に対する私の研究の一部が、『不確実性と情報の経済分析』（九大出版会）として出版されます。興味をおもちの方はぜひ一読いただけたらと思います。